

若者たちへの伝言 (メッセージ)

綾部ロータリークラブ創立55周年記念誌 2009年5月

理外の理

京都市議員 大道 義知

1905年シカゴで誕生した社会奉仕団体に淵源を持つ綾部ロータリーの創立55周年をお慶び申し上げます。私は、綾部ロータリーが産声を上げた1954年の翌年に綾部市に生まれ、現在、京都市の市議員として活動をしています。最近では「限界集落」が注目され、必ずと言っていいほど話題に出てくる全国サイズの都市となっている我が故郷（ふるさと）・綾部を非常に誇りに思っています。

「二つの故郷（中心点）を持つ人は幸せである」と言われたのは、京都綾部会会長の村上農一郎氏です。その理由について氏は「中心点が一つは図形では円であるが、中心点が二つある図形は楕円だが、森羅万象宇宙の仕組みは、すべてこの楕円で成り立っている。安定のスタイルだ。宇宙が安定しているのは中心点（故郷）を二つ持つ楕円の法則があるからだ」と。中心点を故郷に名ぞらえての至言だと思います。外国に行って改めて日本の良さを認識したり、長らくの旅行から我が家に帰ってきた時、落ち着きを感じることが多々ありますが、綾部に生まれ育った未来を担う次世代の皆様も、これから綾部から仕事や就職等で綾部の地から一時、更にはずっと離れられることがあると思いますが、その時にこそきっと故郷“綾部”を再発見されることでしょう。

時代は情報化が益々進展しています。日常生活でもメールでのやり取りが多くなっています。こうした情報コミュニケーションは、近くの人が遠い存在となり、遠くにいる人が近くなるという現象として私たちの日常生活に影響を及ぼすこととなります。故郷綾部も遠い人ほど故郷を慕う思いが強くなるのも、同様の現象なのかも知れません。

「悩んでも悩まない」「困っても困らない」等、通常の論理学ならば矛盾している「理外の理」という言説を生涯にわたり頻繁に次代を担うリーダーに訴えてきたのは松下幸之助氏ですが、彼は、リーダーにとって最も大切なことが、こうしたあいまいな言い方でしか表現できないものを知覚できる視座を持つべきことを訴えているのです。

こうした論理的思考から表現は、今の時代にこそ、また次世代の社会を生き抜くための羅針盤ではないかと私は思うのです。私達の社会は人と人とのコミュニティによって成り立っています。先行き不透明な混迷の社会であるからこそ、表面的な事象に捉われず社会や時代の底流に流れる「見えないもの」、「明確に表現できないもの」に目を向ける「勇気」と、それを捉える「知」を若い人たちには持ち続け「挑戦」して行ってほしいと願っています。

「故郷」には、そういう人間の「視座」と「知」を覚醒させるだけの力（パワー）を私たちに与えているのではないのでしょうか。綾部に生まれ、綾部から飛翔する皆様の益々の発展を祈ります。

